The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	あるガン患者の闘病記録
Author(s)	里井, 達三良
Citation	癌と人. 1981, 8, p. 5-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

あるガン患者の闘病記録

理事　里　井　達三良*

私は男ばかり六人兄弟の３番目に生れたが，上二人下二人の４人は死亡し，いまは直ぐ次の弟と２人だけになっている。兄たちの死因は循還器病系であり，弟二人のそれはいづれもガンである。従って，今日死の二大原因とされている病気を二つながら見て来たという意味で，私の家系は最多死因の概当者と云えるだろう。

とくに，ガンについては，これまで直接の家系での発生をみていないだけに，わが家系での驚きと恐れは大きい。ガンと云っても弟二人の死に至るまでのガン症状の起り方，経過，終末の状況等はまったくと云っていい程ちがっており，その点ガンにも色々あることを痛感したが，以下に記しておきたい末弟の場合，比較的壮年時に発生したものが，その後の生活，仕事，闘病態度等にどのような影響を及ぼしたかについて知って頂くためと，なお一つには，早期にガンを発見してもらう以外に，今のところガンの制圧方策はないという悲しい確信を患者家族の一員として世に訴えたい気持もあって，この雑文を草した次第である。

末弟の発病は千里丘陵で開かれた万国博覧会の翌年の春であった。万博の仕事を終えて，新しい会社の仕事に忙しくしていた私は，ある晩，東京の末弟の妻から電話を受けた。胃の具合が悪くて，都立大学の講義を休講していた弟が，東大医科学研究所附属病院で手術を受けたという知らせであった。子供のころから消化器が弱くて，亡母に一番心配をかけた末弟だったから，とっさに，私はガンの心配が頭に来た。「それはなさそうです」という彼の妻の答えだった。しつこく尋ねる私の質問に彼女はさり気なく答えていたが，「細胞検査が済んでみないと，はっきりしないが，外からみたところでは，その心配はなさそうです」という彼女の口調には妙に確信はなさそうであった。私は「もし検査の結果，悪い結果が出たとしても，本人には絶対そのことを告げないよう，また主治医の先生にもそのことをお願いしておくように」と，くどい程繰返して電話を切った。

数日して上京し，入院先の病院に彼を見舞うと，彼は驚くほど衰弱していたが，元気で私の手を握った。ガンの疑いはまったく彼にはないようだった。東大出版会から，近世中国史に関する専門書を出版した直後でもあったから，学問に対する情熱は，彼の身内を焼いていたにちがいない。岩波書店とも，次の著作について話があるなど，明るく語る彼の眼は澄んでいた。それにもかかわらず，私の気持は冴えなかった。悪性のものにちがいないという疑いは，強く私の心に根づいてしまっていたから，愛情深いくせに気の強い彼が，自分自身の再起を疑っていないことを妙にいじらしく，あわれに思えてならなかったのである。「無理をするな。生きてくれよ。学問などは，しばらく捨てろ」心に呟きながら，病院の玄関を出た私の眼の前に満開の桜があった。あれほど美しく，あれほど哀しい花を見たことはなかった。「来年あいつはこの花を見られないだろう」と思うと，花は俄かに色あせて，視野のうちに薄す呆け，にじんで見えた。

それにも拘らず，彼はそれから三年生きた。しかも，全力をつくして，両端から燃えてくるローソクのように，自己を燃焼させながらガンと戦ったのである。病院に彼を見舞った直後，彼の妻から電話があり，「組織検査の結果はマイナスでした」と知らされたが，その云い方にも力はなくて，私は信じなかった。のちにわかったことだが，彼女はそのとき主治医から事実を告げられていたが，私たちのことを心配して，それを告げなかったのである。そのとき，私の考えたことは，たった一つだった。どうか，彼が最悪の事態になって自分で気づくまで，そのことを気づかないでほしい。また気づかせない

* 関西国際空港ビルディング㈱取締役相談役

でほしい。患者にガンの真実を告げることの可否論については，私は絶対「否」の立場である。彼が学問を捨てられないことはわかり切っていた。戦時中，私が南方にいた間，彼は京大在学中だったが，しばしば私の留守宅を見舞い，彼になついていた幼い私の長女のウマになって遊んでやってくれたが，その時でさえ片手に本を支え読みしながら這っていた，という話を妻から軍事郵便で知らせて来たのを忘れることはできない。だから，予後は限られているにせよ，療養のなかで好きな学問をして，長くもなかった人生を静かに，心残りのないように終らせてやりたい。それがわれわれ家族たちの共通の願いであった。

それからの三年，彼は，ある時は伊豆の海辺に農家の部屋を借りたり，長い夏休みには教え子の軽井沢の別荘に住まわせてもらったり，後に同じくガンで彼のあとを追うことになる最も仲のよかった彼のすぐ上の同志社大学教授の兄といっしょに信州高原でいっしょに暮したり，よそ目には悠々と過した。この間，入退院のくり返しのなかで，専門の学問研究は一日も怠らなかった。大学に出講できなくなってからも，教え子たちの必死の措止にもかかわらず，最後の入院の前，大学院生のためのゼミを東京の自宅に開いたことがある。そのときの録音を，晩年の彼の身辺にいて，親身も及ばぬ世話を焼いてくれた彼の助手Y君が取ってくれたのが残っている。それを聞くと，若者たちの中での彼の声は，もはや，か細く低く，専門用語のむつかしさとあい待って聞きとりにくく，肉身にとっては，彼の無念が伝わってくるようで切ない。流石の彼も最後の入院手術のころまでには，ガンへの懸念はかなり強くなっていたにちがいないと思われる節々が見られた。

しかし，最初の手術から相当の期間，彼がひよっとしたらと，人にも思わせるくらい恢復して行くように見えた日月が続いた。食後の1～2時間，彼は常に腹痛と膨張感を訴えたが，責苦のようなその時間が過ぎると，家人は皆ほっとするのであった。散歩も読書も思い通りに出来た。八ケ嶽に登ると云い出したこともあった。自分では手術後の癒着だけと信じ切っていたようだ。学問の仕事も進むように見えた。若い画家の安い油絵など買い集めたこともあった。趣味のカメラの腕など，少しは上ったようだった。ある年の秋，伊豆の海の日没を撮るのにつき合され，日の沈む瞬間まで気の遠くなるほどの時間，丘の上で待たされたこともある。それは，残り少い彼の人生の中で，離れて住む兄たちが，彼のためにしてやれたせめてもの心遣いとして何時までも記憶に残るのである。ともかく，最初の手術後の三年間，彼はガンと共に懸命に生きた。あの手術が彼にその可能性を与えてくれたことについて，私たち遺族は，いまにして病院の先生方に深く感謝しなければならないと思う。

3年後の最後の手術の日，私は上京して，彼の家族と共に，手術室から帰った彼の意識の醒めるのを待った。その間に主治医の先生から，転移の状態について決定的なことは告げられてあった。私は彼の眠っている間に帰りたいと思った。彼に会えば，きっと気どられると思ったからだ。しかし，彼の妻子はそれを私に許さなかった。私は彼のやせ細った手を握って，今日は忙しいから帰るよ，とだけ云った。

その後，新しく取り組んでいた中国展の仕事にかまけて，見舞ってやれないうちに，弟の容態は石ころが坂を下るように悪化して行った。暇をみて上京したとき，彼は「あまり来てくれへんな」と初めて恨みがましく云った。辛かった。もっと辛かったのは，彼が必死になって流動食を摂ろうとしている気魄であった。吸い飲みから飲むと三分もしないうちに，もどしてしまう。屈せず，また飲む。また吐く。鬼気迫る状況であった。こんなにしてまでも生きたいと願う彼の執念に，現代の医学はもはや何を以ても応じてはくれなかった。数日後の深夜，彼は便所に行こうとしてベットから落ち，当直の看護婦に抱え上げられたあとの明け方，やっと最後の静かな長い眠りについた。行年男盛りの56才であった。